

Toxicology: Review and Prospect (Proceeding of the European Society for the Study of Drug Toxicity) Vol. XIV, Excerpta Medica, 1973.

本書は European Society for the Study (明年から European Society for Toxicology に改称) の第14回年会の内容をまとめたものである。

297ページの中前半約 200ページはシンポジウムの要旨を集載し、後半約 100ページは11名による一般演題である。今回のシンポジウムの主題はすべてトキシコロジーの柱ともいえるべき大きな問題のみである。第1章の「薬力学と毒性」において S. Garattini 教授はその緒言で現在の機器分析技術を十分に駆使して薬物の代謝、吸収、排泄とそれに附随する毒性の問題を動物のレベルから人間へ外挿する努力が必要であることを力説している。ここでは代謝研究に用いられる全身オートラジオグラフィー、毒性の種属差の問題などについて多くの知見が発表されている。第2章は「繁殖」に関する研究成果をまとめたものである。H. Tuchmann-Duplessis 博士は薬物による催奇形性の実験についての方法論を詳細に報告し、また英国ハンチントン毒性研究所の A. K. Palmer 博士は安全性評価についてサリドマイド、ハロペリドールなどの薬物を例示しながら繁殖学者としての意見を述べている。第3章では現在大きな課題となっている動物実験と臨床との関連性についてアムステルダム大学の J. H. Tenreer 博士は免疫病理学の立場から薬物アレルギーの問題をとりあげこれを分子レベルで解決しようと試みている。第4章はチューリッヒ大学の G. Zbinden 教授の司会による遺伝子レベルでの毒性に関する討論である。同教授は以前より環境汚染物質、放射能障害などによる遺伝子への影響を指摘しており、今回も化学物質と生体高分子との相互作用に関する分子生物学、遺伝学からの研究が紹介されている。第5章は「トキシコロジーと薬物療法の将来」という題で P. A. J. Janssen 博士がまとめている。ここでは毒物が生態系を破壊して人類を混乱に追込むことを憂慮すると共にこれを早急に防止する策を立てるべきであることを強調している。

本書は生物系薬学研究者は勿論のこと生薬学などの天然物化学研究に従事している人にとっても化学構造と毒性の相関を知る上で一読に価するものであり推奨出来る本と考える。(164×239 mm/297頁 千葉大学生物活性研究所佐藤哲男)

Chromatography of Antibiotics (Journal of Chromatography Library—Volume 1)

G. H. Wagman and M. J. Weinstein 著

現在分離されている抗生物質は1,000をはるかに超えており、理化学的情報を中心にして系統的に整理することは至難のわざで、ましてやクロマトグラフィーの挙動によって分類することは極めて困難なものと云えよう。

ある抗生物質を単離した場合、これが新物質か既知物質かを正確かつ迅速に見究めるためには、ろ紙クロマトグラフィー、薄層クロマトグラフィー、電気泳動法などを利用することが最良の手段であると思われる。

本書は抗生物質の同定の目的に使用するには最適なクロマトグラフィーデータ集である。初めに ABC 順に並べ、終りに数字や記号で表わされた抗生物質を収載し、各物質ごとにろ紙および薄層クロマトグラフィーの場合にはろ紙や吸着剤の種類、展開溶媒、発色試薬、*R_f* 値、文献が、電気泳動法の場合には電解緩衝液、実験条件などが、ときには向流分配法の条件が簡明に記述されている。

抗生物質を対象とする薬学、医学、農学などの研究者に便覧としてお薦めしたい。199×270 mm/238頁/8,450円 (Elsevier Scientific Publishing Co.) (古谷 力)

Pharmaceutical Applications of Thin-Layer and Paper Chromatography

K. Macek 編

クロマトグラフィーは、今日最も能率的な分析法として広く利用されているが、なかでも薄層およびろ紙クロマトグラフィーは医薬品の研究に不可欠の方法として活用されている。

本書は薄層およびろ紙クロマトグラフィーの技術を基礎と応用の両面から紹介し、とくに97の図と169の表が掲載されており、また末尾に161の繁用呈色試薬の調製法が記されているので大へん便利である。

試料の調製、溶媒や吸着剤の選択、検出法、定量分析への応用、放射性化合物の分析法、薄層クロマトグラフィーと赤外線スペクトルや質量スペクトルとの連動による分析法などが解説され、続いて合成医薬品、ステロイド、強心